

トピックス

これからの新入生，在學生との関わり方で考えること

私は現在、薬学部で兼任として「自己表現論」という科目を担当し、その中で「アサーショントレーニング」なるものを講義している。これは簡単に説明すると、ヒトは自己主張だけではなく、他者の主張も認め、なおかつ相手を傷つけない配慮が必要というテーマの基でコミュニケーション論を展開している。

地域貢献のため、学校長からの依頼で、入学時の全体集会の時間を利用し、生徒に本講義の一部を応用、「心とこころのふれあい」と題し、エクササイズを実施する場面がある。

この目的は「自己開示」、「自己尊重」、「自己肯定感UP」、「所属感UP」であり、言語的・非言語的コミュニケーションに絡み、身体も動かしての表現がポイントである。

このエクササイズは、歯学部新入生の学外研修の一環としても取り入れており、彼らの自尊感情向上に貢献している。

その高等教育機関では、発達障害を抱えている、または可能性のある学生が徐々に入学してきており、本学においてもその限りではない。

発達障害は「脳の機能障害」が原因と考えられており、文部科学省の2002年の調査では、小中学生の6.3%に発達障害の可能性があると示唆されている。ということは、現在彼らの一部が大学生になっていてもおかしくない年代である。

その分類としては、

- ① 広汎性発達障害・・・高機能自閉症、アスペルガー症候群
- ② 注意欠陥多動性障害 (ADHD)
- ③ 学習障害 (LD)

が大別される。

発達障害は、精神障害や知的障害ではないため、その言動や外見上から障害として理解することが困難である。そのため本人の困り具合に周囲が気づかないこと、また本人の身勝手とも取れる行動が、周囲の人を巻き込んで、より一層問題を大きくすること等が生じやすいと思われる。

上述の発達障害において、その障害を疑う場合に面接場面で観察しやすい事柄、もしくは推測可能な事柄としては、以下のことが上げられるが、これはカウンセラーのみならず、科目担当者、学年主任、クラス担任でも同様のことが言える。

① 広汎性発達障害・・・約束していないのに突然面接に訪れる。分かりやすく整理して話すことができない。何度も同じ質問を繰り返す。視線が合わない、何となく態度が固い。相手の反応に関係なく、自分の興味のあることを話し続ける。話の的を得ていない。すなわち友人関係が上手く取れず、孤立しているようで、思い込み、こだわりが激しい。

② ADHDの場合・・・次々と話の話題が変わり、一方的に話をする。相手の質問が終わるのを待たずに出し

奥羽大学歯学部口腔衛生学講座 車田文雄

抜けに話し出す。面接の時間に遅れたり、面接を忘れていたりすることが多く、座っていても身体の一部をどこか動かしている。いわゆる感情の起伏が激しい。掲示物や配布物に気が付かず、レポートや課題を期日までに仕上げられないことが多い。

③ LDの場合・・・誤字・脱字が多い。手書きで文字を書くのがとても遅い。または文字を上手に書くことができない。すなわち読む・書く・計算する・推測する等の基礎的な習得に著しい困難を要している。

以上のことから、今後の対応として、

① 発達障害の診断がある学生の場合に、障害として大学で支援を実施するならば、相談・支援となるカウンセリング室と他の部署や教職員との連携をどのように行うのか、また関係する教職員に対する効果的な理解促進のための対応方法を明示していく。

② 障害の可能性がある場合に、医師の診断を得ることを求める場合が生じるわけで、この際、本人や保護者が障害を理解し、それを受容することが求められる。

具体的な支援は各々の学生の得意不得意の傾向、学習の内容、生活環境等により大きく異なり、必ずしも「ある診断名」がついたから「この支援」と決まるものでもない。

ゆえに「適切な支援」を行うためには、彼らが何が得意で何が不得意なのか、また彼らを取り巻く環境（人的、物的）等について、詳細なアセスメント（個人特性や状況の評価）が必要不可欠となる。それに関わるのがカウンセラーである。

もちろん、支援を受ければ必ず全ての対象者が上手くいくわけではなく、とりわけ自分の得意分野を活かしていくに本人の努力が報われない場合が往々にしてある。その場合は、あらかじめ自分の得意分野を活かせる方向を各教員と共にカウンセラーと一緒に探し出すことが必要になってくると思われる。

これまでは、全てが「本人の言動が悪い」の一言で片づけられてきたことが、「この学生はこういう病気のようです」の一言に救われる（動揺は隠せないものの対応の光が差し込む）のは保護者だけでなく、学生本人も教員でもある。その専門的機関（心療内科等）への架け橋は、カウンセラーが一役買っていると言っても過言ではない。

現在、相談内容として「コミュニケーションや対人関係から来る様々なトラブル」が多い。

今後は、保護者や出身学校の関係教師と連携を取りながら、本人のエピソードも再考し、カウンセリングを進めていかなければならないと感じている。

文 献

- 1) 車田文雄：スクールカウンセラーとして児童生徒に接して思う。日本学校歯科医会誌 103；19-23 2009.